

二〇二六年度入学試験問題

国

語

(六〇分)

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、問題冊子は開かないでください。
- 二、この問題冊子は25ページあります。試験中、ページの脱落等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 三、解答用紙(マークシート)の汚れなどに気づいた場合も、同様に知らせてください。
- 四、解答は、すべて解答用紙(マークシート)に記入し、解答用紙(マークシート)の枠外には、なにも書かないでください。
- 五、解答番号は、1～40まであります。
解答用紙(マークシート)には、問題番号が1～50、選択肢が①～⑩まで印刷されていますが、解答にあたっては、各設問に指示された選択肢の数の中から選んで解答してください。
- 六、マークは必ずHBの黒鉛筆を使用し、訂正する場合は、完全に消してからマークしてください。
- 七、監督者の指示に従って、解答用紙(マークシート)に解答する科目・受験番号をマークするとともに、受験番号および氏名を記入してください。
- 八、解答する科目、受験番号、解答が正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。
- 九、試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

問題一

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

現代^aの日本橋に目をやると、橋の上に高速道路が架橋されている姿がそこにある。この高速道路に覆われた日本橋の姿には、現代都市の成立を支える重要な基盤である高速道路の通る交通インフラとしての日本橋と、江戸東京という都市の象徴的な中心であることをモニュメンタルに示す空間インフラとしての日本橋の重なりを見ることが出来る。

この日本橋の姿が示唆するように、交通機関が多様に分化する現代都市においては、橋の上に橋が架かるなど複雑な交通空間が出現している。このことは川の上に架かる橋を前提として橋を語ることのできていた時代の終焉^{しゆうえん}を私たちに改めて教えてくれる。私たちがふだんの生活で渡っている橋も、たとえば駅構内のホームとホームをつなぐ橋、ホームと改札をつなぐ橋、駅と駅前のビルやロータリーを直結させるテラス式の橋、あるいは歩道橋など、そもそも橋と認識するまでに至らないものが多数存在する。その一方で私たちが A な橋として認識するのは、川の上に架かる橋であり、これらの橋は意匠を凝らしたものが多く、渡る対象としての機能と同じくらい眺める対象としての機能を受け持っている。

このように、私たちの身の回りには、^(注1)河川に架かる橋のほかにも道路を渡る跨道橋や歩道橋、架道橋があるほか、鉄道を渡る跨線橋や線路橋などの多くの種類の橋が存在する。また、自動車で橋を渡る場合には道路橋、歩行や自転車では歩道橋、鉄道の場合には鉄道橋と橋を呼び分け、どの交通でどの障害物を乗り越えるかによって橋の構造も意味も多様となる。そして「橋を渡ること」以前に、どのような交通でどのような障害物を乗り越え、どことどこを結び付けようとするのかによって「橋を架けること」の意味も異なってくる。

道路や線路に架けられた跨道橋や架道橋、跨線橋や線路橋の多くが、河川に架けられた橋に比べると簡素な佇まい^{たたずまい}をしていることが多いのは、それらが道路や鉄道の他に別の道路や鉄道を重ねるという人為に人為を加えた結果であるためだと思われる。それに対して河川に橋梁^{きょうりょう}を架けることは、自然に対する操作であり、その結果完成した橋は社会が自然の克服に成功したことの証^{あかし}となる。跨道橋や跨線橋の「跨ぐ^{また}」という言葉にもよく表れているように、道路や線路に架けられた橋は等身大の技術で越えられるのが当たり前とされる橋であるのに対して、河川に架けられた橋はその社会の持てる技術を駆使した末に離れた兩岸をつなぎ合わせることに叶^{かな}った有り難い橋として生み出される。

さらに、自動車や鉄道に乗ってそれらの橋を渡るとき、自動車や鉄道では「橋を渡る」というモードの切り替えはおこなわれない。自動車や鉄道は今まで通ってきた道の延長で、一方の岸から他方の岸への通行^dをハバむ障害物を乗り越えるための手段としてというよ

りも、これまで通ってきた道路とこれから通る道路の途中にある単なる通過点として橋を渡る。道と道とを接続するかぎりにおいて橋は道と同化し、無に近い存在となる。跨道橋や架道橋、跨線橋や線路橋が、道路や線路を軽やかに「跨ぐ」ように、自動車や鉄道も、一瞬にして橋を「通過」していく。私たちは、そこに橋があるがゆえに障害物を簡単に乗り越えることができ、そして身軽に橋を渡ることができればできるほどそれらの橋をほとんど無意識に通過し、そしてその存在が無に等しくなればなるほど橋は「橋らしい橋」から「ただの道」の領域に押しやられる。そのとき、それは都市の自然となり、都市の背景と化していくのだ。

その一方で、強烈な存在感を放つ橋もある。高架橋である。ある道が、障害物に出くわしたところでそれとの立体的な交差を形作る橋とは異なり、これから出会い得るすべての障害物をあらかじめハイジ^gョするため、はじめから終わりまで立体的な道として出発して帰着する長距離の橋である。たとえば古代ローマの水道橋がその原初形態として知られるが、今日では、高速道路や鉄道にも多く用いられている。高架橋といわゆる一般的な橋との違いは、架橋される対象物にある。一般的な橋の場合には、河川や他の道路や線路等の岸や側面に橋が架けられるのに対して、高架橋の場合にはある地点からある地点とのあいだにあるあらゆるものに橋が架けられる。スケールで比べると一般的な橋が岸と岸を結ぶ点として現れるとすれば、ある地点とある地点を結ぶ高架橋は線として現れる。

高架橋は、壁のように両側の空間を分断しないものの、中空に水平に引かれた線として目の前の風景に分断を生みだしている。たとえば、高速自動車道であればインターとインター（そして途中の各インターほか、その先々での自動車道路ネットワークの網羅する範囲）、鉄道であればターミナルとターミナル（そして途中の各駅、さらには乗換えにより別の路線の各駅）などのタガ^hいに離れたある地点とある地点を高架橋はつなぐが、同時にそれぞれの各地点での風景を分断しもある。

G・ジンメル^(注2) (Simmel, G.) は、「橋は、その構成においてはとも自然を超えているのに、しかも自然の情景に組み込まれている」(Simmel 1909 = 1999: 59) と指摘したが、高架橋は岸と岸とを結びつける一般的な橋に比べると、それが結ぶ範囲が長距離だけに、しかもそれ自体が橋と認識されるかどうかもおぼつかないままに、乱暴な形で自然の風景のなかに埋め込まれることになる。その姿は「密接に、このようにあるしかないと思わせる形で、それが結びつけた河の兩岸と関わりあい」、「橋でもって、たまたまその場に存在していたにすぎない自然の景物は、ぐっと引きしめられ、統一され」、「限りなく連なる空間のなから一部分を切り取り、これを見える形で強調させる性質をもつ。そのため、橋は橋でも風景に結合を呼び覚ます橋のほかにも、高架橋のように風景に収まりきれないがゆえに分裂や拡散を呼び覚ますような橋もあるといえよう。

これらの、ややもすれば渡られる際にも見られる際にも橋であることが見落とされがちな交通インフラとしての橋とは打って変わり、

渡られることがなくとも見られることで

B

 空間インフラとしての橋梁が存在する。たとえば、庭園に置かれた橋やライトアップされた橋、リバークルーズの目玉となるような橋梁群、あるいは画像や映像メディアなどで目にする、鑑賞の対象となる橋である。具体的にはテレビ放送でレインボーブリッジが映しだされている場合に、画面をぼんやりと眺める視聴者にも自ずと^{おの}その発信源が東京であることが了解されるように、実際に渡ることがなくても、視界に飛び込んでくるそれらの橋の存在自体が、目の前の光景を風景や景色、景観にまとめ上げ、意味あるものに変換するときに、それらの橋は交通インフラの領域を脱し、空間インフラの領域に組み込まれる。

ところで、古代ローマ時代に発案され、現代まで受け継がれるも、未だ架橋されずにいる橋がある。イタリア本土とシチリア島とを隔てるメッシーナ海峡の橋である。メッシーナ海峡の架橋に向けて

C

 な研究が始められたのは19世紀後半から20世紀前半にさかのぼるが、この段階では計画にいたることはなかった。晴れて1950年以降に具体的な計画やコンペがおこなわれるようになるが、その都度、着工に漕ぎ着くことのない状態が続き、近年では2006年と2009年に新しい計画が浮上するも2013年に白紙撤回されて現在にいたっている(Denison and Stewart 2012 = 2012:12)。このメッシーナ海峡大橋の建設が計画通りに進められていれば、今日現在、世界最長を誇る明石海峡大橋(中央支間1,991m、全支間長3,911m)と、世界最高の主塔をもつミヨウ高架橋(2004年完成、高度343m)を抜いて、世界最長でかつ最高の橋が誕生するはずであった。

遙か古代から現代まで受け継がれる未完の架橋プロジェクトの存在は、地形上は離れている双方の土地を連結されるべきものとして意識させる。さらには、橋梁工学の進歩により、メッシーナ海峡に橋を架けることがもはや夢物語でなくなった今日では、これらの両土地は、あたかも人為的に切り離されたままにされているかのようにみなされる。もちろん、橋が架橋されなくとも双方の土地の行き来は古来より船によっておこなわれていたほか、近年では海峡を飛び越えてイタリア本土、さらには世界各国のさまざまな都市と空路で結ばれた状態にあり、必ずしも橋の未架設な状態が両土地間の交通ネットワークをサマタ^jげているわけではない。ただそこに欠けるのは陸上交通ネットワークの生み出す両土地の物質的に固定されたつながりのみである。

未来のある日にメッシーナ海峡の橋が完成すれば、双方の土地の結合状態が従来の分離状態に代わって優位な様を呈するだろう。海と空の交通ネットワークがこれまでに築き上げてきた双方の土地間の連結では果たし得なかった両土地間の視覚上の結合状態を橋の架橋が導き出すからだ。

橋を架けることとは、自然の克服という反自然的な人為的操作であるのに加え、自然のなかに橋を溶け込ませてゆくという超自然的な操作でもある。この橋のもつ両義性により、橋^kの架橋が希求される自然の風景よりも、すでに橋の架けられた人工の風景のほうが、よ

り好ましい自然な風景として受け止められる。なぜなら、「橋の構築において、人間の仕事はゼツチョウ¹をきわめ」、「結びつけようとする人間の意志に、別々に離れている空間が受動的に抵抗するばかりでなく、特別なものを作りださねばならぬということが、能動的な抵抗として意志に對置される」からだ (Simmel 1909 ≡ 1999:57)。橋の完成が、切り離された兩岸の結合を導きだすのではなく、あくまでも兩岸は切り離されたままの状態で橋によって結合されていることが強調される。この、切り離されていることと結合されていることとの対比が不朽に併存する姿こそが橋に美的な価値を与える。

(楠田恵美「河川・橋——架け／渡る——」による)

(注) 1 跨道橋……道路の上をまたぐ橋の総称。歩道橋はその一種で、歩行者や自転車専用として設けられている。

2 G・ジンメル……ゲオルク・ジンメル (一八五八～一九一八)。ドイツの哲学者、社会学者。

問一 傍線部 a「現代の日本橋」とあるが、この話題から筆者が述べようとしているのはどのようなことか。次の 1～4 のうちから最も

も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は [1]。

- 1 現代は、意匠を凝らした眺める対象としての橋が減少してきていること。
- 2 現代は、日本橋が空間インフラから交通インフラに変わりつつあること。
- 3 現代は、複雑な交通空間の出現で橋の構造や意味が多様化していること。
- 4 現代は、橋が都市の交通網を支える基盤としての役割に徹していること。

問二 空欄 A・C に入る語句はなにか。次の 1～8 のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| 1 | 先鋭的 | 2 | 断片的 | 3 | 潜在的 | 4 | 表層的 |
| 5 | 典型的 | 6 | 神秘的 | 7 | 消極的 | 8 | 本格的 |

問三

傍線部 b「河川に架かる橋」とあるが、これを筆者はどのようなものと述べているか。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 4。

- 1 自然の制約を乗り越えるために人間の技術を最大限に発揮してつぐられ、その成果が自然の克服に成功したしるしとなるもの。
- 2 人間が渡る交通的な機能に加えて景観として眺める意匠的な機能を持ち、人為に人為を加えることによって生み出されたもの。
- 3 現代の私たちが橋を語るうえで無意識に前提としているたぐいの橋であり、橋のなかでもことさら象徴的な役割をになうもの。
- 4 河川に人工物を設置するという点で自然に対する操作を意味する橋であり、結果として自然の風景を大きく損ねてしまうもの。

問四

傍線部 c「等身大の技術」とはどのような技術か。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 5。

- 1 人類がもちうる限りの最先端の技術。
- 2 専門性が不要な誰にでも扱える技術。
- 3 同程度の力を持つ人々たちによる技術。
- 4 現代の人類の力に見合うだけの技術。

問五

傍線部 d・g・h・j・l と同じ漢字を含むものはどれか。次の 1～4 のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。解答番号は 6 10。

d 「ハバむ」

- 1 銃で的をソゲキする。
- 2 ソセンの墓参りに行く。
- 3 民衆がソゼイに苦しむ。
- 4 犯罪計画をソシする。

g 「ハイジヨ」

- 1 ハイキガスの量を削減する。
- 2 多くの有名人をハイシユツする。
- 3 旧来のルールをハイシする。
- 4 勝利のシユクハイをあげる。

h 「タガイ」

- 1 新しいゴラク施設をつくる。
- 2 要人のゴエイにあたる。
- 3 二者にはゴカン性がある。
- 4 先生が絵をゴランになる。

j 「サマタゲ」

- 1 ボウリヤクをめぐらす。
- 2 営業ボウガイにあたる。
- 3 容疑者がトウボウする。
- 4 ボウケンの旅に出る。

l 「ゼツチヨウ」

- 1 対戦相手をチヨウハツする。
- 2 成功してウチヨウテンになる。
- 3 カンゼンチヨウアクの物語。
- 4 彼は事件のチヨウホンニンだ。

問六 傍線部 e「都市の自然となり、都市の背景と化していく」とはどういうことか。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選

びマークしなさい。解答番号は 11。

- 1 橋が障害物を越える手段ではなく普通の道とみなされることによって、都市の自然や景観を引き立てる裏方的存在になること。
- 2 橋が自動車や鉄道が通る道の延長としての役割をになうことによって、都市のなかで当たり前の景色や環境の一部になること。
- 3 橋が道と道とを接続する一つの通過点として設置されることによって、交通インフラの機能を備えた橋として認められること。
- 4 橋がただの道路として利用されて橋らしい存在感を失うことによって、橋の下に流れる河川と両岸との境界が曖昧になること。

問七 傍線部 f「強烈な存在感を放つ橋もある。高架橋である」とあるが、筆者は「高架橋」のどのような点に「強烈な存在感」があ

ると考えているか。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 12。

- 1 古代ローマの水道橋のような立体的な橋が、自然の景物を引きしめて統一するような美的効果をもっている点。
- 2 自然の風景に収まりきらずに続く長い橋が、目の前の空間と遠く離れた空間を直接つなぐ様子を見せている点。
- 3 はじめから終わりまで途切れずに続く橋が、あらゆる障害物から切り離されて各地点の風景に調和している点。
- 4 ある地点とある地点を結ぶ線のような橋が、連なる風景を分断し一つ一つの空間を印象的に切り取っている点。

問八 空欄 B に入る語句はなにか。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 13。

- 1 向こう側へと渡った気分させる
- 2 その場が都心であることを伝える
- 3 古代から現代まで継承されてきた
- 4 その存在意義が認められるような

問九 傍線部 i 「メッシーナ海峡の橋」とあるが、メッシーナ海峡に橋が架かった場合、どのようなことが起こると考えられるか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 14。

- 1 双方の土地の間に交通ネットワークが生まれて人々が行き来できるようになる。
- 2 双方の土地に架かる橋の存在感によって分離状態がかえって目立つようになる。
- 3 双方の土地のつながりが橋という物質的な結合によりはつきりと視覚化される。
- 4 双方の土地の隔たりが解消されることによって橋が反自然的なシンボルとなる。

問一〇 傍線部 k 「橋の架橋が希求される自然の風景よりも、すでに橋の架けられた人工の風景のほうが、より好ましい自然な風景として受け止められる」とあるが、それはなぜか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 15。

- 1 橋は、切り離されたままの兩岸を結びつけることによって分離と結合が同時に存在する状態をつくり出すものであり、こうした相反する関係が一つの景色の中で併存する姿が美しく感じられるから。
- 2 橋は、分かれていた兩岸を完全に一体化して切れ目のない連続した景觀のように見せるものであり、そのような視覚効果によって自然景觀全体が調和のとれた一つの風景として受け止められるから。
- 3 橋は、人工物でありながら自然の中に完全に溶け込んで周囲の景色と違和感なく一体化するものであり、人々にその存在をほとんど意識させないまま兩岸を自然に結びつけているように見せるから。
- 4 橋は、人間の意志と技術が自然の抵抗を乗り越えた証として景色の中心に置かれるものであり、その秩序ある整った姿を見せることで人工の風景のほうが自然の風景より優れていると思わせるから。

問題二

榛名忍^{はるなしのぶ}は、かつて「天才高校生作家」ともてはやされた小説家だったが、大学生になってからはスランプに陥っていた。そのようななか、忍は大学内で競歩選手の八千代篤彦^{やちよあつひこ}と出会い、いつしか競歩を題材にした小説を書きたいと思うようになっていた。以下は、忍が書き上げた「競歩小説」を、明日に輪島^{わじま}でのレースを控えた八千代に読ませる場面である。次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「できたんだ」

抱えていたリュックから、紙の束を取り出した。大きなダブルクリップで留められたA4のコピー用紙が、百五十枚。自宅のプリンターで印刷し、リュックに詰め込んでここまで運んできたから、ヨスミ^aがところどころ折れている。

原稿を見下ろして、八千代が息を吸った。何か――神々^{こうこう}しい何かを前にしたような顔で、ゆっくりと手を伸ばす。両手で原稿を受け取ると、その重さに一瞬驚いたようだった。

「重いだろ」

先回りして忍が言うのと、静かに首を縦に振った。

「小説って、重いんだよ」

強^{こわ}ばった表情のまま、八千代が原稿を捲^{めく}る。瞳が揺れて、口が真一文字に結ばれていく。

「俺が読んでいいんですか」

「もちろんだよ。二年以上、取材させてもらったんだから」

「編集さんは読んだんですか？」

「まだ。送ってすらいらないから」

八千代に原稿を渡したら、百地^{注ももち}さんに送ろう。そう考えて輪島まで来た。

「明日がレースだし。いろいろやり切ったあとに、気が向いたら読んで」

八千代の目が再び原稿に向く。生唾^{なまつば}を呑み込む音が、忍にもはつきりと聞こえた。とんでもないものを渡されてしまった、という顔だ。

「丁寧な感想をくれとか、批評してくれとか、監修してくれとかじゃないから。俺が渡したかったただだから」
久々に完成させた長編小説を前に、怯^{おび}えているのは忍の方かもしれない。誰かと共有することで、その恐怖を振り払いたいのだろう

か。

「読みます」

噛み締めるように八千代は言った。忍の目を真つ直ぐ見据えて、頷いた。心強い読者だな、と笑って礼を言おうと思つたら、彼は忍が座つていたベンチに腰を下ろした。

原稿を膝にのせて、小説のタイトルが書かれた一枚目を、捲った。

「え、今から読むの？」

「どうせ部屋に戻つてもやることはないです」

いや、でも。忍がもごもごと繰り返しているうちに八千代は原稿の二枚目を捲つてしまう。「明日レースだろ？」とやっと忍が言つたら、邪魔するなという顔をされてしまった。

しばらく、ベンチに座つていた。姿勢良く原稿を読み続ける八千代がすぐ側にいる。紙を捲る音がするたびにうなじがざわざわして、我慢できずにホテルを飛び出した。

まだ自分の泊まるホテルにチェックインしていないことを思い出し、できるだけ時間を掛けてホテルに向かい、チェックインを済ませた。部屋に入つた方がいいが、ベッドに横になつてもテレビを点けても、八千代が今どのあたりを読んでいるか気になつて落ち着かない。シングルルームの中を忙しなくうろつた末、仕方なくホテルを出た。

50キロのレースも長いが、本を読むのだから同じくらい時間がかかる。長編小説一本を、八千代は何時間かけて読むだろう。

空がオレンジ色の夕焼け半分、紺色の夜空半分に混ざり合っている。その下を、忍は再び明日のコースへと向かった。一周2キロのコースを、一人で歩いた。選手達のような研ぎ澄まされたフォームではなく、普段通りの自分の歩き方で、石畳の歩道を歩いた。

靴の裏から石畳の冷たさが這い上がってくる。それでも忍は足を止めなかった。寒さに安心する。空気の冷たさに肌が強ばるのが、心地いい。

こうやって、小説を書く苦しみを、誰かの目に触れる恐怖を、これがなくなつたら自分は何者にもなれないという不安を、誤魔化しながら生きていくんだろう。誤魔化し切れなくなつて、自分で自分の心を何度も折るんだろう。

道の両端に点々と立つ街灯に、明かりが灯りだした。石灯籠を模した背の低い街灯が、明日のコースをぼんやりと浮き上がらせる。覚悟というには、柔らかすぎるかもしれない。一つの街灯の前で立ち止まつて、忍は思う。でも、やっぱり、書き続けること以外に、自分のコドウや呼吸を確かめる方法がわからない。不器用で要領が悪い。上手に夢を見られない。ついでに言えば、きっと上手にも生

きられない。それでも、歩き続けた先にぼんやりと灯る明かりがあると信じている。

ただ、それを信じて歩いている。

上手に夢を見られなかった人へ。いつか夢を諦めなくてはいけない人へ。それでも足掻^{あが}いてしまう人へ。足掻いた上でやはり去らなければならなかった人へ。小説を書こう。俺は、そんな風に生きていこう。

自分の両足を見下ろし、いつか八千代から教わった競歩の歩形を真似^{まね}た。靴の踵^{かかと}で石畳をならし、腰を左右に揺らし、体全体を使つて歩く。

10 mほど歩いて、すぐに普通の歩き方に戻った。車が何台か自分を追い越して行つて恥ずかしくなったのと、やつぱり、自分の歩き方で歩こうと思つたからだ。

結局、コースを二周した。それでもまだ早い気がして、八千代の泊まるホテルの裏から海を眺めた。すっかり夜になつてしまつたら、綺麗な景色が見えるわけでもない。ヨットハーバーや駐車場、マリナーパークの一角を、暗がりには波の音だけを聞きながら歩いた。縁石や階段に腰掛けてみたけれど、すぐにまた歩き出す。

そんな無益な時間が、どうしても必要だった。小説だつて同じだ。無益だと思ふ人には無益だ。読んだところで腹が満たされるわけでも、お金が得られるわけでもない。でも、必要だったから忍は小説を読んできた。必要だったから、書いてきた。

遠くに聞こえたり近くに聞こえたり忙しい海の音に耳をカタム^gけながら、今日はこんなことばかり考えているなと笑いが込み上げてくる。

さて、次はどこに行こうか。そう思つて、立ち止まつたときだった。

力強い足音が、聞こえたのは。よく知る長身が、暗がり泳ぐように近づいてきたのは。

「ここにいた！」

^h 珍しく声を張つた八千代が、小走りでやつてくる。

手には、ダブルクリップで留められた原稿の束があつた。

「よく、ここにいてわかつたな」

「人間は落ち込んだとき海に行くつて、先輩が言つたんじゃないですか。去年、館山^{たてやま}で」

「いや、俺、別に落ち込んでないし。ちよつとナイーブな気持ちになつてただけで」

「なんで俺が読んだけでナイーブになるんですか」

「うるさい。そういうものなんだよ」

息を吸った。無意識に握り締めていた両手から力を抜こうとしたのに、できなかった。

「……どうだった」

遠回しに聞くことも、できなかった。

「レース前に、なんて酷い小説を読ませるんですか」

忍の前に仁王立ちして、八千代が声を凄ませる。

「人が明日、世界陸上を……ついでの今後の人生も賭けてレースに出ようとしてるときに、大学で伸び悩んでる競歩選手とガケつぷちの売れない小説家が主人公の小説なんて読ませて。しかも主人公、最後のレースで負けるじゃないですか。競歩、引退してるじゃないですか。アスリートの道を諦めて普通に生きていく選択してるじゃないですか。小説家は小説家で、売れない自分のまま業界にしがみついた決意なんてしちゃってるし。なんですかこれ。本人達は納得してるかもしれないけど、読んてるこっちは辛すぎますよ。読むつて言つたの俺ですけど、よくもまあ……こんな辛い小説、輪島まで持つて来ましたね」

原稿を忍の前に掲げて、八千代は一気に捲し立てた。肩で息をしながら、忍のことを睨みつける。

彼は、怒るに違いないと思った。主人公の二人を《勝たせなかった》ことを。二人が《負け》を噛み締めて次の場所へ向かう終わりを、八千代だけはユルさないと。

「面白かったよ」と言つてほしいなら、他の人に読んでもらう。それこそ百地さんだったら、どれほど修正が必要だと判断しても、「面白かったです」とまづは言うだろう。

それでも、彼に読んでほしかった。

「でも、面白かった」

波音に紛れるような擦れた声で、八千代は首を縦に振った。何度も何度も振った。

「小説の中に、俺がいました。調子がいいときの俺の《歩き》が、この中にありました」

原稿を両手で握り締めて、八千代は今度は小さく頷いた。やはり、何度も何度も頷いた。

「高島でのレースのとき、こうやって歩けば50キロで勝てるって、確かに見えたんです。なのに、輪島に向けて練習してるうちに、どうやって歩いてたのかわからなくなった。どれだけ練習しても、自分の映るビデオを観ても、わからなかった。強かったときの自分が

見つからなかった。でも、この小説の中にいたんだ。調子よく歩いているときの俺が、先輩の小説の中にちゃんといたんだ」
上擦った声で言った八千代が、胸の前で原稿を抱える。まだ本にすらなっていない。なるかもわからない紙の束を、大事そうに抱きしめる。

「俺に小説の善し悪しはわかりません。これで先輩が救われるのか、ちゃんと売れるのか、偉い人に評価されるのか、そういうのはわからないです。わからないけど、俺にとっては凄く大事な本になるということは、よくわかります」

「気が早いな」

もう充分だと思ってしまう自分に、忍は溜め息をこぼした。この小説が八千代以外の目に触れることなく、本になることもなく消えていったとしても、悔いはいないかもしれない。

「逃げちゃ駄目ですよ」

忍の真意を見透かしたように、八千代が言う。穏やかだけど鋭利な、呪いのような言葉だった。

「どんなに辛くても、最前線で戦ってください。俺も歩き続けられる限り歩きます」

ああ、わかったよ。言われなくてもわかってるよ。肩を震わせて、そう言った。口からこぼれるのは笑い声なのに、涙が込み上げてくるような感覚がする。涙は出ないのに、体の芯を焼くような熱量だけが、忍の中で渦巻いていた。

(額賀滯『競歩王』による)

(注) 百地さん……忍が作家デビューしたときに本を出した出版社、玉松書房の編集長。

問一 傍線部 a・e・g・j・k と同じ漢字を含むものはどれか。次の 1～4 のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選び

マークしなさい。解答番号は 16 20。

a 「ヨスミ」

- 1 タイグウが改善される。
- 2 彼はイチグウを照らす人だ。
- 3 グウジが祭礼をとり行う。
- 4 グウゼン昔の友人に会った。

e 「コドウ」

- 1 コドウの人と呼ばれる。
- 2 自分の力を周囲にコジする。
- 3 試合前に味方をコブする。
- 4 エンコを描くように回る。

g 「カタムけ」

- 1 試験のケイコウをつかむ。
- 2 自己ケイハツにつとめる。
- 3 剣術のケイコにいそしむ。
- 4 師匠のケイフをたどる。

j 「ガケつぶち」

- 1 自分のショウガイをつづる。
- 2 裁判長をダンガイする。
- 3 海を臨むダンガイに立つ。
- 4 一人でカンガイにふける。

k 「ユルさない」

- 1 新しい活動キョテンを探す。
- 2 多少の誤りをキョウウする。
- 3 キョコウの世界に入り込む。
- 4 信じがたいボウキョである。

問二

傍線部b「とんでもないものを渡されてしまった、という顔だ」とあるが、このときの八千代的心情はどのようなものか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は21。

- 1 忍が編集者にも見せていない原稿を自分に見せてきたことを意外に思い、自分が彼からそこまでの信頼を寄せられていたことに戸惑っている。
- 2 忍が渡してきた原稿の分量や物理的な重さになかば圧倒され、明日のレースまでに全部読み切れるかどうかという不安で気が重くなっている。
- 3 忍が長期間の取材を経て書き上げた原稿を託してきたことに、その覚悟の重みをしっかりと受け止めねばならないという責任感を抱いている。
- 4 忍の書いた小説に自分がどのように描かれているかによって、この先の自分の評価や立場が危うくなるかもしれないという緊張を感じている。

問三

傍線部c「ホテルを飛び出した」とあるが、忍がこのようなしたのはなぜか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は22。

- 1 八千代がその場ですぐに原稿を読み始めたのを見て、渡した原稿は読破するのに何時間もおかる長編だったため、読み終わるまで一緒に待つことはとてもできないと思ったから。
- 2 八千代が強ばった表情で黙々とページを捲る様子を見て、原稿の内容を否定されるのではないかという不安や恐れが確信に変わり、その場に居続けることができなくなったから。
- 3 八千代が集中して原稿を読んでいるのを邪魔してはならないと考え、彼が心静かに物語の内容に入り込めるように、自分はその場から離れたほうがよいだろうと思い至ったから。
- 4 八千代が目の前で自分の原稿を真剣に読み始めたため、その反応や評価が気になって落ち着くことができず、緊張や居心地の悪さを感じて居ても立ってもいられなくなったから。

問四

傍線部 d 「靴の裏から石畳の冷たさが這い上がってくる」とあるが、このときの「冷たさ」という感覚は忍にとつてどのようなものとして描かれているか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 23。

- 1 競歩の選手たちが背負っているプレッシャーの大きさを小説家である自分に学ばせるもの。
- 2 小説家としての立場や将来に対して自分が抱えている不安を束の間紛らわせてくれるもの。
- 3 明日のレースの展開を気にしている自分に八千代が通るコースの苛酷さを予感させるもの。
- 4 自分の小説家としての才能はすでに失われているのだらうという深層心理を刺激するもの。

問五

傍線部 f 「やっぱり、自分の歩き方で歩こうと思ったからだ」とあるが、「自分の歩き方で歩こう」という表現は比喩的にどのようなことを意味しているか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 24。

- 1 不器用なら不器用なりに希望をもつて前進し、自分ができることをやって生きていこうということ。
- 2 八千代の競歩の歩き方を無理に真似るよりも、自分のやり方で進んだほうが歩きやすいということ。
- 3 夢を諦めかけている人に希望を与えるために、小説家として覚悟をもつて生きていこうということ。
- 4 他人の目ばかり気にしていないで、これからは周囲に気を遣わず自由な生き方をしようということ。

問六

傍線部 h 「珍しく声を張った八千代が、小走りでやってくる」とあるが、このときの八千代の心情はどのようなものか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 25。

- 1 忍が夜の海でずっと自分を待っていたことに気づいて驚いている。
- 2 忍が書いた小説の筋書きが気に入らず苦情を言おうと思っている。
- 3 忍が落ち込んだ様子で見ているのを見て励ましてやろうと考えている。
- 4 忍が書いた小説の感想を早く伝えたいという思いが高まっている。

問七

傍線部ⅰ「無意識に握り締めていた両手から力を抜こうとしたのに、できなかった」とあるが、このときの忍の様子はどのようなものか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 26。

1 八千代に読ませた小説は自分なりに手応えがあるものの、彼に作品を過小評価される可能性も僅かながらに残されており、油断できずにいる。

2 自分の作品を他人に読まれるということの苦しみや怖さを八千代が理解しておらず、作品の感想よりも彼の無理解に対する怒りが生じている。

3 原稿を読み終えた八千代に小説の感想を尋ねようと思っているが、期待と恐れが入り混じって緊張が高まり、体の強ばりを抑え切れずにいる。

4 海にしているのは落ち込んでいるせいだと八千代に凶星を突かれてしまい、適当にあしらったものの、いまだ動揺する気持ちを隠し切れずにいる。

問八

傍線部ⅱ「でも、面白かった」とあるが、八千代は忍の小説をなぜこのように評価したのか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 27。

1 レースを明日に控えているのに、忍から縁起でもない物語を読まされて戸惑っていたが、そこには人生を賭けて戦う人間の苦悩が反映されており、世に求められている作品であることは揺るぎない事実だと思えたから。

2 競歩選手が最後のレースで敗北し引退してしまうという結末に納得はいかないものの、登場人物が活躍している姿もきちんと描かれており、選手に対する最低限のリスペクトは作品の中に込められていると思ったから。

3 作者である忍にとっても競歩選手である自分にとっても辛いストーリーだと感じられたが、作中には探し求めている自分の歩く姿が描かれており、これからの自分にとって大切な作品になるだろうと感じられたから。

4 登場人物がレースに負けるという結末は自分への当てつけのように思えたが、小説には調子がよい頃の自分の歩き方が細かく丁寧に描写されており、明日のレースのためのヒントを忍に教えてもらったと気づいたから。

問九

傍線部 m 「体の芯を焼くような熱量だけが、忍の中で渦巻いていた」とあるが、このときの忍の心情はどのようなものか。次の 1 ～ 4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 28。

1 八千代が自分の小説を受け止め共感してくれたことに深い安心感を抱き、これまでの苦悩に見切りをつけて、前へ進む勇気を取り戻している。

2 八千代の真剣なまなざしと力強い言葉に胸を揺さぶられ、感謝と決意が交じり合って熱情となり、そのたかぶりが胸の奥からあふれ出ている。

3 八千代が小説への感想とともに「逃げちゃ駄目ですよ」と迫ってきたことで、これからの自分が試されているような切実な緊張感を覚えている。

4 八千代の励ましの言葉に心を動かされながらも、その言葉の重さに圧迫を感じ、自分の進む道が縛られているような複雑な思いを抱いている。

問題三

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「春の奈良へいって、馬酔木の花ざかりを見ようとおもって、途中、木曾路をまわってきたら、おもいがけず吹雪に遭いました。……」僕は木曾の宿屋で貰った絵はがきにそんなことを書きながら、汽車の窓から猛烈に雪のふっている木曾の谷々へたえず目をやっていった。

春のなかばだというのに、これはまたひどい荒れようだ。その寒いつたらない。おまけに、車内には僕たちの外には、一しよに木曾からのりこんだ、どこか湯治にでも出かけるところらしい、商人風の夫婦づれと、もうひとり厚ぼったい冬外套をきた男の客がいるつきり。——でも、上松を過ぎる頃から、急に雪のいきおいが衰えだし、どうかするとぼあつと薄日のようなものが車内にもさしこんでくるようになった。どうせ、こんなばかばかしい寒さは此処いらだけと我慢していたが、みんな、その日ざしを慕うように、向うがわの座席に変わった。妻もとうとう読みさしの本だけもってそちら側に移っていった。僕だけ、まだときどき思い出したように雪が紛々と散っている木曾の谷や川へたえず目をやりながら、こちらの窓ぎわに強情にがんばっていた。……

どうも、こんどの旅は最初から天候の具合が奇妙だ。悪いといってしまうえばそれまでだが、いいとおもえば本当に具合よくいつている。第一、きのう東京を立つてきたときからして、かなり強い吹きぶりだった。だが、朝のうちにこれほど強く降ってしまったえば、ゆうがた木曾に着くまでにはとおもっている、午すこしまえから急に小ぶりになって、まだ雪のある甲斐の山々がそんな雨の中から見えだしたときは、何んともいえずすがすがしかった。そうして信濃境にさしかかる頃には、おあつらえむきに雨もすっかり上がり、富士見あたりの一帯の枯原も、雨後のせいにか、何かいきいきと蘇ったような色さえ帯びて車窓を過ぎた。そのうちにこんどは、彼方に、木曾のまつしろな山々がくつきりと見え出してきた。……

その晩、その木曾福島しほの宿に泊って、明けがた目をさまして見ると、おもいがけない吹雪だった。

「とんだものがふり出しました……」宿の女中が火を運んできながら、

 いうのだった。「このごろ、どうも癖になつてしまつて困ります。」

だが、雪はいっこう苦にならない。で、けさもけさで、そんな雪の中を衝いて、僕たちは宿を立つてきたのである。……

いま、僕たちの乗った汽車の走っている、この木曾の谷の向うには、すっかり春めいた、明かるい空がひろがっているか、それとも、うつつとうしいような雨空か、僕はときどきそれが気になりでもするように、窓に顔をくつつけるようにしながら、谷の上方を見あげてみたが、山々にさえぎられた狭い空じゅう、どこからともなく飛んできてはさかんに舞い狂っている無数の雪のほかにはなんにも見え

ない。そんな雪の狂舞のなかを、さつきからときおり出しぬけにばあつと薄日がさして来だしているのである。それだけでは、いかにもたよりなげな日ざしの具合だが、ことによるとこの雪国のそとに出たら、うららかな春の空がそこに待ちかまえていそうな**あんばい**にも見える。……

僕のすぐ隣りの席に**い**るのは、このへんのものらしい中年の夫婦づれで、問屋の主人かなんぞらしい男が何か小声でいうと、首に白いものを巻いた病身らしい女もおなじ位の小声で相槌を打っている。べつに僕たちに気がねをしてそんな話し方をしているような様子でもない。それはちつともこちらの気にならない。ただ、どうも気になるのは、一番向うの席にいろんな**恰好**をしながら寝そべっていた冬外套の男が、ときどきおもい出したように起き上つては、床のうえでひとしきり足を踏み鳴らす癖のあることだった。それがはじまると、その隣りの席で向うむきになつて自分の外套で脚をつつみながら本をよんでいた妻が、僕のほうをふり向いては、ちよつと顔をしかめて見せた。

そんなふうで、三つ四つ小さな駅を過ぎる間、僕はあいかわらず一人だけ、木曾川に沿つた窓ぎわを離れずにいたが、そのうちだんだんそんな雪もあるかないか位にしかちらつかなくなり出てきたのを、なんだか残り惜しうに見やつていた。もう木曾路ともお別れだ。気まぐれな雪よ、旅びとの去つたあと、もうすこし木曾の山々にふつておれ。もうすこしの間でいい、旅びとがおまえの雪のふつてゐる姿をどこか平原の一角から振りかえつてしみじみと見入ることができるまで。――

そんな考えに自分がうつけたようになってゐるときだった。ひよいとしたはずみで、僕は隣りの夫婦づれの低い話声を耳に挿さんだ。

「いま、向うの山に白い花がさいていたぞ。なんの花けえ？」

「あれは**辛夷**の花だ。」

僕はそれを聞くと、いそいで振りかえつて、身体をのり出すようにしながら、そちらがわの山の端にその辛夷の白い花らしいものを見つけた。いまその夫婦たちの見た、それとおなじものでなくとも、そこいらの山には他にも辛夷の花さいた木が見られはすまいかとおもつたのである。だが、それまで一人だけ **B** 自分の窓にもたれていた僕が急にそんな風にきよときよとそこいらを見まわし出したので、隣りの夫婦のほうでも何事かといったような顔つきで僕のほうを見はじめた。僕はどうもてれくさくなって、それをしおに、ちよつと僕とは筋向いになつた座席であいかわらず熱心に本を読みつづけている妻のほうへ立つてゆきながら、「せつかく旅に出てきたのに本ばかり読んでゐる奴もないもんだ。たまには山の景色でも見ろよ。……」そう言いながら、向いあいに腰かけて、そちらがわの窓のそとへじつと目をそそぎ出した。

「だって、わたしなぞは、旅先きででもなければ本もゆつくり読めないんですもの。」妻はいかにも不満そうな顔をして僕のほうを見た。

「ふん、そうかな」ほんとうを云うと、僕はそんなことには何も苦情をいうつもりはなかった。ただほんのちょっとだけでもいい、そういう妻の注意を窓のそとに向けさせて、自分と一しょになって、そこいらの山の端にまっしろな花を簇むらがらせている辛夷の木を、二本見つけて、旅のあわれを味あじわって見たかったのである。

そこで、僕はそういう妻の返事には一向いっとりあわずに、ただ、すこし声を低くして言った。

「むこうの山に辛夷の花がさいているとさ。ちょっと見たいものだね。」

「あら、あれをごろんにならなかつたの。」妻はいかにもうれしくてしょうがないように僕の顔を見つめた。

「あんなにいくつも咲いていたのに。……」

「嘘うそをいえ。」こんどは僕がいかに不平そうな顔をした。

「わたしなんぞは、いくら本を読んでいたって、いま、どんな景色で、どんな花がさいているかぐらいはちゃんと知っていてよ。……」

「何、まぐれあたりに見えたのさ。僕はずっと木曾川の方ばかり見ていたんだもの。川の方には……」

「ほら、あそこに一本。」妻が急に僕をさえぎって山のほうを指した。

「どこに？」僕はしかし其処そこには、そう言われてみて、やつと何か白っぽいものを、

 認めたような気がただけだった。

「いまのが辛夷の花かなあ？」僕はうつけたように答えた。

「しようない方ねえ。」妻はなんだかすつかり得意そうだった。「いいわ。また、すぐ見つけてあげるわ。」

が、もうその花さいた木々はなかなか見あたらないしかった。僕たちがそうやって窓に顔を一しょにくっつけて眺めてみると、目なかいの、まだ枯れ枯れとした、春あさい山を背景にして、まだ、どこからともなく雪のとはつちりのようなものがちらちらと舞っているのが見えていた。

僕はもう観念して、しばらくじつと目をあわせていた。とうとうこの目で見られなかった、雪国の春にまっさきに咲くというその辛夷の花が、いま、どこぞの山の端にくつきりと立っている姿を、ただ、心のうちに浮うかべてみていた。そのまっしろい花からは、いましがたの雪が解けながら、その花の雫しずくのようにばたばたと落ちているにちがいがなかった。……

(堀辰雄「辛夷の花」による)

(注) 1 馬酔木……ツツジ科の低木で、二、四月に開花する。花の色は白からピンクまであり、壺つぼのような形をしている。

2 木曾路……中山道なかせんどうの一部。木曾川に沿う賛川宿えんかわ(長野県塩尻市)から馬籠宿まごめ(岐阜県中津川市)までの十一宿あたりをいう。木曾街道。

3 辛夷……モクレン科の高木で、三〇四月に開花する。六枚の白い花卉を枝につける。

問一

傍線部 a 「いいとおもえば本当に具合よくいつている」とあるが、「僕」がどのように感じたのはなぜか。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 29。

1 今度の旅は最初から悪天候に見舞われたが、雪が苦にならない自分にとってはさほどの影響はなく、むしろ妻と一緒に窓ぎわの席から外の雪景色を楽しむことができたから。

2 東京からの道中は春の季節に見合わない荒れ模様となったが、途中から急に雪のいきおいが衰えだし、そのうち薄日までが車内にさしこんできて暖をとることができたから。

3 木曾の宿を立つときにはすでに猛烈な吹雪だったが、そのせいで車内には乗客も少なく、座席の間を自由に移動しながら道中を思い思いのやり方で過ごすことができたから。

4 東京を出発した時はひどい吹きぶりだったが、旅が進むにつれて強い雨がよい具合におさまり始め、結果として車窓から鮮やかですがすがしい景色を見ることができたから。

問二

空欄 A

に入る語句はなにか。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 30。

1 物珍しそうに

2 わびしそうに

3 気の毒そうに

4 所在なさそうに

問三

傍線部 b・d・f の語句の意味や言い換えた言葉はどれか。次の 1～4 のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。解答番号は 31、33。

b 「あんばい」

1 具合

2 予兆

3 期待

4 時期

d 「残り惜しそうに」

1 横車を押すように

2 足もとから鳥が立つように

3 後ろ髪を引かれるように

4 雨垂れ石を穿^{うが}つように

f 「とりあわずに」

1 納得できずに

2 相手にせずに

3 気がつかずに

4 異を唱えずに

問四

傍線部 c 「僕のほうをふり向いては、ちょっと顔をしかめて見せた」とあるが、このときの「妻」の様子はどのようなものか。次の 1～4 のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 34。

1 「僕」に隣りの座席に移動してくるように伝えている。

2 「僕」に隣りの客の行動に対する不快感を伝えている。

3 「僕」に本を読んで時間を過ごす退屈さを伝えている。

4 「僕」に中年の夫婦の声で眠れないことを伝えている。

問五 空欄 B・C に入る語句はなにか。次の1～8のうちから最も適当なものをそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

- い。ただし、同じ選択肢を二回選ぶことはできない。解答番号は 35・36。
- | | | | |
|--------|---------|---------|---------|
| 1 はっと | 2 うつとりと | 3 いそいそと | 4 しんみりと |
| 5 ちらりと | 6 そそくさと | 7 ぼんやりと | 8 せかせかと |

問六 傍線部 e 「向いあい」に腰かけて、そちらがわの窓のそとへじつと目をそそぎ出した」とあるが、このときの「僕」の心情はどの

ようなものか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 37。

- 1 せっかく外に辛夷の花が見えているのに、妻が本ばかり読んでいることに不満を抱いている。
- 2 辛夷の花を自分も見つけたくて、さらにその景色を妻といっしょに楽しみたいと思っている。
- 3 隣の夫婦に花を見逃したことをさとられて気まずくなり、気分をまぎらわせようとしている。
- 4 辛夷の花の話題で妻の興味を引き、何とかして彼女の心を楽しませてやりたいと考えている。

問七 傍線部 g 「あんなにいくつも咲いていたのに。……」とあるが、このように言う「妻」の心情はどのようなものか。次の1～

4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 38。

- 1 夫はずつと窓ぎわの席に張りついて外を見ていたにもかかわらず、辛夷の花を見逃していたことに心底あきれている。
- 2 夫にも辛夷の花がきれいに咲いていたのを見てほしかったのに、彼が気づかなかったことをもったいなく思っている。
- 3 夫が自分の読書を悪く言ってきたことに反感を覚え、彼がうらやましがるような嘘をついて報復しようと考えている。
- 4 夫がぜひ見たいと思っている辛夷の花を、自分は本を読みながらでも見ることができて勝ち誇った気分になっている。

問八

授業でこの文章を読んだ生徒たちが、次のように感想を出し合った。傍線部1～5のうちから本文の内容に合わないものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 39。

生徒A——木曾路で雪がやんだあとに、辛夷の花が咲いているという乗客の声を聞いて、「僕」は自分も見たいと思ったけれど、結局見ることはできず、仕方なく心の中で花の姿を思い浮かべていたんだね。

生徒B——列車の中は寒かったり落ち着かない乗客もいたりして決してよい環境とは言えなかったようだけど、移り変わる天候の中で見える景色が印象的で、「僕」はそれなりに旅を楽しんでいたようだね。

生徒C——二目の朝に思いがけず雪が降って「僕」は驚いたけれど、列車で移動しているうちに天候が変わり、山々に見られた辛夷の花のような雪の解け残りが、「僕」の心に強く焼きつけられたんだね。

生徒D——列車がいくつかの駅を過ぎて、もうすぐ木曾路から離れるというときでも、「僕」は雪のふる木曾の山々に心を引かれていたため、もう少し雪がふり続けられたいのにとしみじみ感じているね。

生徒E——「僕」は天候の不順をそこまで気にせずに受けとめていたけれど、「妻」が車窓の景色にあまり関心を示さなかったので、もつと二人で旅の景色を共有したいという気持ちを抱いていたんだね。

問九

この文章の作者である堀辰雄の代表的な著作はなにか。次の1～4のうちから最も適当なものを一つ選びマークしなさい。解答番号は 40。

1 草枕

2 金閣寺

3 伊豆の踊子

4 風立ちぬ